

令和4年度 第1回 大和郡山市総合教育会議

①開催日時 令和4年10月20日（木） 午後3時～午後4時

②開催場所 大和郡山市役所 307会議室

③出席者 上田清 市長、谷垣康 教育長、牧浦温代 教育長職務代理者、
菊岡洋之 教育委員、岩田淳尚 教育委員、大原末子 教育委員、
以上6名

事務11名

④傍聴人数 0名

⑤次第

1. 開 会
2. 市長挨拶
3. 出席者紹介
4. 「中学の部活動の地域移行」について
5. その他
6. 閉 会

⑥議事

○事務局 これより令和4年度第1回大和郡山市総合教育会議を開催いたします。

それでは、最初に上田市長から開会の御挨拶をお願いいたします。

○上田市長 この夏、ミュージックビデオが完成しました。御苦労さまでした。てくてく城下町の11月号に掲載します。QRコードも掲載していますので、見てくれる人が増えてほしいと思っています。

今、市民交流棟の工事の最中ですが、来年7月にグランドオープンいたします。市民交流棟には、福祉作業所の製品を置くコーナーをつくろうと話を進めています。いろいろな作業所で商品開発をしてくれています、リピーターが来てくれて、障害の有る方との交流もでき、気軽にコーヒーが飲めるようなところになってほしいと思っています。

さて、今日は学校、部活動についてです。今回は、やはり働き方改革が、1つ背景にあると思います。教員がどう受け止めるか、部活が好きで好きでしかたない先生もいますし、実際それが生きがいという人もいます。その中でどうバランスを取っていくかが課題です。

実は働き方改革というのは、今日のこういう工事現場にも及んでいまして、今、議論になっているのが工事の発注の平準化、つまり1年間毎月工事が出るようにしよう。そうすると、集中的に工事がある月がなくなるはずと言われています。ところが、水関係で、川の工事などは出水期にはできませんから、どうしても限定されます。4月に工事といわれてもすぐに入札はむずかしい。でも、それを今、数字に出しているんです。平準化率という数字を出して、それをもとに平準化しましょうと、これがやはり働き方改革ですね。建設作業員も週休2日にしましょうと。

世の中が、そういう流れになってる中で、学校というのは、そうはなっていないところがある。だから、採用試験受ける人間がどんどん減ってきてるというのも、これまたひとつ、事実ですよ、大変です。だから、その働き方改革をすることによって、教員がほんとうに休めるかどうかということも含めて、根本的に考えないと駄目だろうと思います。。

今朝とあるネットを見ていたら、お笑い芸人のマシンガンズの滝沢秀一さんという方がいて、この人はごみの清掃員なんです。ごみの清掃で見える人間性とか社会について書いておられて、面白かったね。SDGsを一生懸命うたっているテレビ局では、めちゃくちゃごみ箱があふれかえっていると。言ってることとやってることが違う。こういうことが、やはりよくないと、世の中の大きな問題ではないかなと思います。建前ではなくて、この部活動についても、ほんとに教員の皆さんの意見とか考え方を、ちゃんと踏まえてですね、いい形で進められたらよいなと思いますので、よろしくお願いします。

○事務局 本年度第1回目の総合教育会議でございますので、本日御出席いただいております皆様を御紹介させていただきます。

委員紹介 ー略ー

最初に本日の配付資料を確認させていただきます。

それでは、会議のほうに入らせていただきます。引き続き次第に従って進めさせていただきます。

それでは、次第4に飛びますが、中学校の部活動の地域移行についてでございます。

○福西学校教育課長

まず、地域部活動の推進事業についてです。全国的な報道でもありますように、部活動についての課題は大きく報じられております。また、本市におきましても、生徒数の激減に伴い部活動のチームが成り立たないなど、持続性においても大変厳しさを増しております。また、指導面におきましても、競技経験のない教師が指導せざるを得なくなったりとか、休日も含めた部活動が求められたりするなど、教員にとっても部活動の指導が大きな業務の負担となったり、超過勤務の大きな原因となっております。そのような中、スポーツ庁のほうから運動部活動の地域移行化、文化庁のほうから文化部の地域移行化の提言がありました。

運動部活動の地域移行に関する提言、資料のほうを御覧ください。カラー刷りのものが3ページにわたっているものがございます。まず1ページのところですけれども、提言の目指す姿としまして、少子化の中でも将来にわたり、子供たちがスポーツを楽しむ機会の確保、それから、教員の働き方改革、専門性のある指導者から子供たちがスポーツを学ぶことが可能となるような環境づくり。それから、勝利至上主義ではなく、スポーツを楽しむ、喜ぶことを感じられるものなどが挙げられております。また、改革の方向性として、令和5年度から、休日の運動部活動移行に向けた改革集中期間とし、段階的に地域移行に推進させていきます。これが国の考え方の地域移行でございます。

大和郡山市の各部の部活動の状況につきましては、資料の3枚目でございます。令和4年度、夏、3年生引退後の各部活動の状況となっております。これを見ていただきますと、3年生が引退すると、廃部または募集停止の部活動が赤印のほうで示させていただきます。生徒数の激減によって、学校で単独で部活動が成立しにくい状況が続いております。

また、次のページをめくっていただきますと、全国体力・運動能力・運動習慣調査のデータとなっております。これは中学校の2年生、男子・女子を対象としたものでございます。1枚目は男子、2枚目は女子生徒でございます。これを見ていただきますと、体力検査の結果を見ても、大和郡山市の子供は全国より低い水準のものが多くなっております。ブルーのほうが全国より高いものとなっております。かなり全国的なもの比べても低いのが今の現状でございます。これらの現状を見ても、大和郡山市の子供たちにとって、生涯にわたってスポーツを楽しむ環境づくりというものは急務であると考えられております。

それから、運動部活動の地域移行化に向けた環境整備は次の3の資料を御覧ください。これが国の体制例を示したものでございます。こちらでは、右下のところの体制例の1、それから体制例の2というものがございます。

まず、体制例の1は市町村が運営団体となっているものでございます。市町村が、スポーツ、文化団体、大学、民間事業者、それから、地域、学校、共同本部等と連携したものでございます。そこから指導者を派遣していただいて、学校施設を借りて、それぞれの部活をするというものでございます。中学校は、希望する生徒がいましたら、そちらの会場に行って、そこで指導を受けるという形が体制例の1でございます。

体制例2につきましては、民間総合型地域スポーツクラブが運営団体となっているものでございます。社会体育施設を使って、地域総合型のスポーツクラブが運営するところに各中学校の生徒たちが自ら参加していくものでございます。大和郡山市の現状を考えますと、体制1のほうが現状としましては適しているのかなど、現段階では考えております。

大和郡山市の体制につきましては、最後の資料を御覧ください。あくまでも現段階の案となっておりますけども、まず目的としましては、生徒数の減少に伴う部活動の在り方の見直し、生徒の専門的指導を提供できる場の設定。2つ目、競技経験のない教員の指導や、教員の働き方改革への対応。3つ目、地域としてスポーツに継続的に親しむことのできる新たな環境づくりとなっております。

それから、まず人材確保としましては、左の青いところにありますように、各団体のほうに協力を求めながら人材の確保に努めたいと考えております。まず大和郡山市におきましては、大和郡山市の体育協会、それから、既存のスポーツクラブがあります。それから部活動指導員。現在、部活動指導員13名、各中学校のほうに配置してありますが、

そういった人材の活用。それから教職員、先ほど市長のほうからもありましたように、教職員の中にも部活動のほうを頑張ってやりたいという者がいるかなと思いますので、そういった教員の活用。それから一般希望者、一般にいる市民の方々にも協力を求めるというところで、人材バンクの作成と管理をしていきたいと思っております。これに関しましては、今後、移行が進むにつれて、スポーツ推進課のほうでとりまとめをしていただければというふうに考えております。

それから、真ん中に休日の合同部活動というものがあります。これは部活動に伴うルールづくりを書かせていただきました。2つ目にありますように、原則として複数の生徒の指導に当たると。特に教員が指導に当たる場合におきましては、自分の学校の生徒だけではなくて、市全体と見渡して、自分が専門性のあるものを各学校の生徒たちに指導に当たるということが原則となっております。それから4つ目、まだこれは案ですけども、大体、報酬のほうは、1人1時間1,600円というふうに考えております。

それから、右のほうの学校教育課としてやる場所ですけども、あくまでも移行期間におきましては、中学校のほうでも部活動を全てなくすというものではありませんので、休日の部活動移行におきましては、部活動は原則平日のみと移行していかれたらというふうに考えております。それから、あと、休日に部活動の参加は、希望者の生徒のみという形となっております。また、それに伴って、スポーツ保険等の必要性も出てくるというふうに考えております。

それから、先ほどもありましたように、教職員が指導する人材バンクには登録をしてもらって、兼職兼業の届けを必要とさせていただきます。学校としましては、学校の場所ですよね、施設、体育館、グラウンド等を使用してもらおう。それから、あと、用具を学校が提供するというふうなことを考えております。それから、あと、定期的に、やはり学校がお任せではなくて、指導者と顧問が綿密な打合せをしていくということも考えております。

それから、一番下にありますように、令和5年度から7年度に改革の集中期間。先ほど国の提言でもありましたように、この期間におきまして、段階的に移行を進めてまいりたいと考えております。まず来年度、令和5年度につきましては、先行的に3つから4つの種目の部活動を試験的にスタートさせていけたらなというふうに考えています。それから、全ての部で、休日において部活動を移行していかれたらと思っていま

す。将来的には、休日のみではなく、平日の部活動も全て地域のほうに移行していければというふうに考えております。

まずスポーツの持つ力、それから人々の集まる力や人々を巻き込む力を使って、大和郡山市の子供たちにとって、将来にわたって子供たちがスポーツを楽しむ機会の体制の整備を図っていきたいと思っております。また教育大綱にもありますように、スポーツを通じて多くのことを学び、ふるさとの将来を担う子供たちを育てていきたいと思っております。

以上でございます。

○事務局 ただいま、福西課長より、部活動の地域移行について御説明をいただきました。これに関しまして、委員の皆様方、何か御意見ございますか。

○谷垣教育長 昨日、都市教育長協議会がありました。どの市もまだ決まっていない。例えば、生駒市は1年早く、試行的にスタートしたということで、来年から、順次、全ての区で導入していこうとしています。イメージとしては、部活動に熱心な教職員を休日にこの形で参加してもらい謝礼を出すというのが基本的な考えのようです。あまり外部の指導者とは考えておられない感じはしました。ゼロではないと思いますが。

それから、一方で、先ほどの文科省の体制例2のほうの地域総合スポーツクラブにお任せする形で考えているところもありました。地域ごとにいろいろです。大和郡山市の場合は、中学校の部活動を包含できるようなスポーツクラブはないので、概ね市の教育委員会とスポーツ推進課が連携しながら進めていかなければならないという状況です。

最終的な目標については、県の方でも正直まだ決まっていない状況と聞いています。文科省も走りながら考えてるという状況で、明確に最終地点はわかりませんが、やはり考え方の基本には、中学校から部活動を地域に移行していこうということで、どのぐらいの期間、時間をかけて行っていくのかも検討しなければなりません。

次期学習指導要領の改定時には、そういうことを書き込んでいきます。逆に、そこまでの間は移行期で、次の学習指導要領からは、部活動というのは、指導者だけの話になるかもしれません。それで部活動はというと、地域にあるスポーツクラブで、活動していただく。そうすると、地域のスポーツも活性化し、市のスポーツの振興につながるのではなかという考え方です。

スポーツの部はスポーツ庁で、文化部に対しては文化庁ですが、スポーツの在り方を根本的に変えていこうということだと思います。根本的に日本と欧米を比べると、日本は今まで、学生は学校体育、大人になったら企業スポーツが担ってきたところがあります。例えば、日本代表の選手、オリンピックに出場するというと、今までは、中学校、高校の部活動、どこかの企業が担っていたが、それを地域のクラブにしていこうと。ヨーロッパはそういう形です。様々なスポーツクラブがあり、その中でいろいろな選手がいて、それが国の代表になって、オリンピックに出る。学校や企業ではなく、クラブチーム、それは市民が育てたクラブチームで、そういった方針なのかなと個人的な感想をもっています。

サッカーの世界は、もう完全にそうなりつつあります。将来、日本代表やプロ選手を目指すような子はクラブチームで練習している。この地域では、セレッソ大阪、ガンバ大阪などのジュニアチームに入って、切磋琢磨して、成長していく。そうではない子は中学校で部活動をしていました。

中学校で部活動をする子はプロを目指してはなくて、サッカーを好きでやっている。もちろん大会があって、勝とうとして頑張って練習していますが、将来プロになるということは考えてない。

野球は今もやはり学校スポーツですね。甲子園を目指す。逆に、中学校までは、硬式野球クラブですよ。しかし、高校では甲子園に出て有名になって認められたらプロに入っていけるというのが野球の状態です。そうではなく、クラブチームが担っていくというのが、スポーツ庁の考えてることなんです。ただ、日本が切り替えていくのかどうかというのが問題です。

初等中等教育局というのが学校教育を主管してる局ですけども、そことが必ずしも一致してない。部活動はやはり大事だという人もいます。学校にもそういう方がいます。来年、まだ手をつけないところもあります。大和郡山市はこのように段階的に少しずつやっっていこうかと考えています。

皆さん、部活動の経験があると思いますが、どう思われますか。

○**牧浦委員** 学校の部活動よりも、地域のクラブの方が何か強いような気がします。そういうことではないんですか。

○**谷垣教育長** 今はそうですね。やはり専門的な指導者が複数いますから。

○牧浦委員 学校の部活動の子どもたちがそういったところに移行してということですよ。

○谷垣教育長 そうですね。ただ、みんながみんなトップを目指してる子ばかりじゃない。スポーツを楽しみたい子を、学校で見るということは残るかもしれません。

チームスポーツの大会があるわけですが、中学校には中体連というのがあって、中学校しか出場できない。それを来年からは、クラブチームでも参加できるということです。全国、例えば野球だったら野球、サッカーならサッカーで、中学校名で出るチームもあれば、何々サッカークラブで出るところもある。それでチャンピオンを目指していくということになってくる。サッカーが好きなので、サッカーをしたいという子どもは部活動として、残っていくかもしれません。ここはわかりませんが。

○岩田委員 その地域の枠を超えて、例えば大和郡山市の中学生だけど、奈良市のスポーツチームに行くと、そういうこともあるわけですね。

○谷垣教育長 そうですね。

○岩田委員 枠を取り払う感じなんですね。

○谷垣教育長 そうですね。今現在もバスケットは、パイレーツですね。強い選手というか、一生懸命な選手はそこへ入ります。思いの違う子は、中学校の部活動に行くということです。プロを目指すとはまでは言わなくても、勝利目指している子はクラブチームに入る。

○谷垣教育長 大和郡山といえば片桐VBCというチームがある。小学生ですが、全国でも優勝する。大和郡山の子どもだけでなくて、ほかの市からも来る。残念ながら、ジュニアチームがないですが。

○福西学校教育課長 そうなんです。中学は入れないです。

○谷垣教育長 中学校区でいえば片桐中、南中に分かれてしまう。中学生のジュニアのチームを作れば、日本一になる可能性も。

○上田市長 片桐VBCは、もう4回全国優勝している。奈良県の参加チームでいうと5、6しかない。そこで優勝したら、東京ではもう有名で、片桐VBCというと全国一だというね。

○谷垣教育長 女子もできました。

○上田市長 女子もできましたね。先生が育成していましたね。

- 上田市長 大阪桐蔭のブラスバンドは梅田先生という人が引き受けています。200人を一代で育て上げた。とてもすごい人ですね。高校ですが、体育クラブというのは、そういうふうで育ってるクラブも結構ある。
- 谷垣教育長 スポーツでも文化でも、1人の指導者で変わる。
- 牧浦委員 休日に学校へ出ていただいたときは、1時間1,600円ということですけど、地域のクラブに行く場合は、専門的な指導があり、個人が払うのですか。
- 谷垣教育長 一般的には、そうですね。クラブに会費を払う。その会費で運営されてるわけですね。結構、費用はかかります。入会金など、国が補助するという話はありません。部活動の方は、報酬として指導者へは謝礼を払わないといけないので、それは市が支払う。国が3分の1、県が3分の1、市が3分の1と言っていましたね。生徒には負担をかけないと。クラブチームの場合は、入会金が必要ですね。
- 上田市長 そういったところ、大阪桐蔭はどうしているのかな。年100回公演を目指して、100回公演行ってる。土日は全部公演です。全国から呼ばれています。
- 上田市長 極端に分かれていくのではないかと思います。野球を例にとってみると、高校野球をやめるとなると、高校野球を売りにして選手を集めている私立学校もありました。そういう高校で、地域移行という、それはもうプロの軍団のようなものが学校に関係なくできる。ドラフトを目指すチームができる。今はもう既に高校野球は崩れているが、学校教育ではなくなるということですね。公立はなくなるでしょうね。
- 谷垣教育長 そうですね。ある意味、そういうことを認めていくことになる。トップを目指すこと、その子どもたちは、クラブに行く。一方で、スポーツ好きは、部活になるということかもしれません。
- 上田市長 BMXや自転車、スケボーなど、奈良県に練習会場ありません。とても費用がかかっている。サッカーでは、夏休みに3週間、アルゼンチン合宿する。費用はどうなっているのだろうか。
- 大原委員 そうなるとね、余裕ある家庭はいいけれど。給食代も払えない人もいる。
- 上田市長 スポーツ人口が減るかもしれない。
- 谷垣教育長 この部活の40%前後がスポーツです。文化のほうは入ってません。文化部ももちろん同じことですが、文化部は休日活動してる場所はほとんどない。強いて言えば、吹奏楽部。ただし、吹奏楽はニーズがなかった。各学校で、地域の人が教えに来てくれる。吹奏楽は、小編成で、東中と南中です。

○菊岡委員 野球やサッカーは、人気がある。団体競技であれば、優秀な子ども集めてプロを目指すクラブチームということがありえる。1人、すごいピッチャーがいても、他の選手が普通なので、全国大会、甲子園出れないということもあるので、今度の制度がうまく機能して、いい方向へ向かうのかなと思います。

○福西学校教育課長 今はバドミントンが人気ですね。

○菊岡委員 オリンピックで活躍があると人気になりますね。アニメの影響もありますね。その地域の指導者で、施設もその優先的に優遇して、補助もして、そういうプロリーグに近いようなジュニアリーグみたいなのを育成するのは、ほんとにやる気のある、やりたい子にとってはいい方向へ向かうかなと。

一方で、そこまでの気持ちはないけれど、ちょっと体を動かしたい、運動を楽しみたいという子どもたちの受け皿をどう確保するかが問題かと。

○上田市長 アメリカでノーヒットノーランをした岩隈選手が、一週間部活を指導する番組がありました。岩隈投手がびっくりしたことは、例えばキャッチャーが、一球一球、全部、監督の指示にしたがっていること、それから、練習は罵倒されること、怒られることと、もうそれが染みついているということです。そこで、岩隈投手が行ったことは、監督に頼んで、まずチームを2つに分けて紅白戦しよう。そして、紅白戦の監督は選手から選び、チームの名前も自分たちで決めて試合をなさいと言うと、もうそれが最初にできない。そういう経験がなから。その少年野球は典型的な例だけど、結構多いと思います。勝つことだけが目的になってしまっている。失敗を恐れて萎縮している。だから、こういった意識を、学校スポーツであっても、クラブスポーツであっても、変えれないといけないのではないかと。

○谷垣教育長 指導者によるのかな。

○上田市長 そうですね。プロならいいではないし、教員が、全部いいわけでもない。やはり人ですね。

○谷垣教育長 今回のこういう地域クラブというのは、小学校も同じですが、学校の部活動ではないわけです。ほとんどの場合、経験のある保護者が監督をしたりね。

どれだけ本格的に研修をしてるか、経験あるかわかりません。

○上田市長 少年野球などは、保護者の応援で成り立つところがある。かなり昔は、それによって優遇されたりすることもある。

○谷垣教育長 試合に行くときに、車を何台出すかという話もある。保護者の応援があって、初めて成り立ってる。

○谷垣教育長 今回においては、中学校も、その延長線上で行えばどうかという部分はあるんです。ですから、きっちりとした指導者が必要です。

勝利至上主義で、柔道でしたか、全国大会をやめた、小学生がいましたね。

小学生の全国大会で、柔道はもうやらないと言って。あれは、勝利至上主義で、子供の頃から優勝、勝て勝てでいくわけですから、体壊す子もいました。

○上田市長 確か応援の声がひどくて、応援の声で相手潰そうとしている。それが理由であったと思う。

○岩田委員 小学校でスポーツをしていた子どもたちが、中学校でそのまま続けるでしょう。小学校で何もしていなかった子どももいる。今は最初、部活動に入る子が多い。それがなくなったら、スポーツしない子はスポーツしないままに行く可能性があります。社会体育で、受け皿があったとしても、そこへの入り口が、学校の方で導入できるのでしょうか。仮に、将来的に部活がなくなるとすれば、今は、こんな部活あって、土日は地域社会のところへ行きなさいと、道案内できますが、全く部活なくなると、小学校のときにスポーツしていなかった子どもにとって、入り口がなくなる可能性はあるのかなという感じはしますね。

○谷垣教育長 今のままの延長で行くとそうなる可能性ありますね。

○岩田委員 体育、スポーツに触れない子が増える可能性ある。

○谷垣教育長 先ほどの文科省の体制例2のほうですけどね。今のままではできませんが、そういう地域総合スポーツクラブでね。

○岩田委員 小さいときから触れられていたら自然に、中学校で入っていける。小学校から限られた生徒で、いきなり放り出されたら、続けられない子どももいると思います。

○谷垣教育長 もっとふだんからスポーツに親しめる環境が必要。大和ふれあいスポーツクラブというのがあって、日々、頑張っていたらいい。いろんな種目ができるようなスポーツクラブがあって、そこに入会は必要だが、サッカーやって、テニスやって、それは子供から高齢者までね、それがヨーロッパのスタイルじゃないですか。

○岩田委員 専門だけじゃなくて、例えば陸上やっていたり、その子がまたバスケやったりとかそういう、いろんな環境がね。

○谷垣教育長 夏は水泳してね、冬はラグビーして、それが本当のスポーツ環境やね。

○岩田委員 とてもイメージできる。

○谷垣教育長 そうですね。そうすると、もう学校でスポーツをしなくてもとなる。学校はちゃんと学習するところで、スポーツするのは別のところでってなるのが理想なんでしょうけどね。

○岩田委員 今、そういう受け皿というのがないですよ。

○谷垣教育長 学校での部活動としては、トップ目指そうじゃないけども、楽しめるような。運動部って1つだけつくって、春は野球して、夏は水泳する、そういうのもいいのではないかと。

○岩田委員 学校の体育の授業のようなものですかね。

○谷垣教育長 文科省は、学校では体育が必要。体育けども、ただスポーツは別に地域でという考え。我々が大きく意識を変えないといけない。

○上田市長 国民体育大会についてはどうですか。

○谷垣教育長 大人が対象ですね。市長が体育協会の会長もしておられます。これを機に、スポーツ環境をどうしていくかですよ。奈良国体が9年後で、今の中学生ぐらいがその中心になる。二十歳過ぎぐらいの年齢になる。

意欲的な指導者がいて、実際に接点があれば、クラブチームとしてやろうとか、少しずつ広がっていけばいい。

○上田市長 スポーツクラブ、ものすごいことになっているらしいよ。年に2回ほど矢田で卓球大会ありますが、卓球台、何台も並んでいて、70、80、90の人たち集まっています。ふれあいマラソンも、あれは子供たちも、可能性がいっぱいある。

○谷垣教育長 ありますね。

○上田市長 ペタンクって競技あるのですが、実は全国優勝をするのが、小学生なんです。だから子供も一緒に入ると言いますが、なかなか入らないらしいです。世代を超えて、スポーツをすることを考えていかないと。ペタンク、グランドゴルフ、ゲートボールなどでね。学校体育から離すということならね。

文化部は学校でいいのではと思うんですけどね。吹奏楽は確かにコンクールがあるので、エスカレートする要素があるでしょう。

○上田市長 人材バンクをつくるということなんですが、ひとりの人に集中することは良くないと思います。充て職は別として、人材バンクに組織の名前挙げると、頼られてしまう。

一般希望者からたくさん手が挙がらないかもしれませんね。かつて国体に出場した人など、そんな方はいっぱいいるじゃないですか。その辺にかかっていると思います。

○谷垣教育長 サッカーやバスケットなどは、プロのチームがあるわけですから、プロにしても普及したいということもありますし、週に一回ぐらいなら教えていただいて。

○上田市長 奈良のバンビシヤスね。

○谷垣教育長 あとは学校がどう捉えるかなんですよ。この前、5中学の校長先生に話聞いたら、多くの先生は喜んでるってことです。

○福西学校教育課長 はい。大変な部分があると思います。専門じゃないところなど。

○谷垣教育長 極端に分かれてきているところがありますね。好きな人は、やり過ぎといわれるぐらいの方もいるし、一方、残業はしたくない、責任が思いとを感じるなど、働き方改革ということもございます。日曜日に出勤しても、対価が支払われるなら、やりがいもある。教員として指導してるので、特殊業務手当として。

○上田市長 私は山岳部でしたが、国体もインターハイもあって、その試合にも出ながら、土日全部犠牲にして山へ登って、全部持ち出しでしたね。でも、好きで好きでしょうがなかったですね。

○谷垣教育長 やりがい搾取ということばがあります。やりがいがあって、やってみましたという。それは搾取してるって怒られます。ただ、今でも、多くの教員は喜ぶのかなと思いつながらお話ししています。

○福西学校教育課長 そうですね。

○谷垣教育長 やりたい人は、これに登録して取り組んでほしい。

○福西学校教育課長 はい。去年、小学校の先生で、サッカーを指導したいということで、教職やめて、クラブチームに行かれた先生もいます。

○谷垣教育長 高校では、部活動に結構規制があります。

例えば、中学校でも、平日2時間に、休日は3時間、週2日は休養日入れるなど。クラブチームの仕事なら好きなだけやれる。

○上田市長 顧問はいなくなる？

○福西学校教育課長 今の段階では、休日の移行に関しては、顧問は必要かなと考えております。完全に平日も移行となれば、もう顧問もなくなるかと。

○上田市長 寂しいですね。

- 岩田委員 団体競技は、人数少なくて廃部になることもありますし、やりたい野球ができないという子どもがいますので、地域で取り組むことはいいと思います。サッカーもそうです。また、そこへ専門知識、スキルのある指導員の方がついていただけるのは、いいことだと思います。そこで開花されるというふうなところも起こり得るのかなと思う。
- 大原委員 そうですよね、それはスポーツでも音楽でも。
- 谷垣教育長 例えば陸上なら、この休日は、A 中学校では短距離でやる、B 中学校では長距離、投てきは、という方法ができるのではないかと。大和郡山の場合では陸上の専門の方がいますので、指導してもらおう。
- 上田市長 そういう意味で、大阪桐蔭の梅田先生は、やはりそういう優れたところがある。世界一受けたい授業に2回出てます。
- 谷垣教育長 指導者といえば、登美丘高校のダンス部の顧問もすごいですよ。
- 上田市長 小学校の市町村別のマラソン大会で、ずっと奈良市のチームが勝つ。奈良市、クラブチームね。市では臨時でやるけど、クラブでやってる子には太刀打ちできない。そういう方向なので、学校単位もなくなってきている。
- 谷垣教育長 子供にとっても、学校ですべてではなく、もう一つ何か違う集団に入るということもいいことと思うんです。こっちで頑張れるとかね。
- 岩田委員 先行的に、三、四種目で、ほぼ決めているのですか。
- 福西学校教育課長 校長先生から、ラグビー、剣道、卓球、陸上辺りかなという話はしてましたが、まだ決定ではないです。
- 谷垣教育長 個人種目のほうがやりやすい。剣道は、武道場に皆集まって、専門の方が教えたらいい。
- 上田市長 いいですね。
- 谷垣教育長 卓球も、各学校の卓球部の子を集めて、専門的な人が教える。
- 福西学校教育課長 はい。
- 谷垣教育長 ラグビーは郡中なんです。ラグビースクールというのがあって。ラグビー部の子が、校区を変えてでも郡中へ行ってるんです。他の中学校の子でもかまわないとすれば、休日だけですけどね。
- 上田市長 その子どもたちが御所実業へ行く。何人も活躍しています。

- 谷垣教育長 ラグビースクールがそのまま中学生の部をつくったって構わないと思うんですね。でも、団体競技の場合は難しいんです。大会があるので、複数の学校が集まったときに、どのようにして出場するか。一緒に練習するが、試合には出られない友達がいる。一緒になって、クラブチームとして大会出ることも考える。いいピッチャーがいる。あの子がいれば勝てるとなると、入れたらいいと。それで違うチームの名前でとも考える。
- 菊岡委員 特殊なのが、このなぎなたですね。やはり指導員も限られますしね。興味はあるが、中学校にはない。一度のぞいてみたい。
- 福西学校教育課長 今、現在、郡山西中に、学生のとくに日本の大学チャンピオンになった人がいてるんですけども。その人が片桐中学校なので、西中の指導が今できてないんですね。
- 谷垣教育長 国体で優勝。
- 福西学校教育課長 そういった人材もいてるということなんです。
- 谷垣教育長 そんな人が取りあえず日曜日だけは指導してくれるなど。別にしなくてもいいので、ほかの中学校にも声かけて、なぎなたしたい子いたらおいでって言うたら、それが普及だと思うんですね。
- 上田市長 さっきの少年野球の話ですが、エースが入ったチームに対して、別のチームが諦めてしまった。でも、岩隈選手が教えたかったのは、チームワークでしょうと。実際、エースがいなくてエースが誕生していくという話がある。
- 菊岡委員 いろいろ選択肢あっていいんじゃないですかね。ちょっと人間教育的には古くさいことされるチームと、やっぱり勝つこと、プロを目指して頑張るチームと。それを公表しておいて、うちのクラブはこうとこですと。選択肢が広がる。
- 上田市長 例えば、よくないかもしれませんが、アリと行列の話で、2割は一生懸命前向きですが、真ん中は人の顔見てて、後ろの2割は抵抗している。この抵抗している2割は負けたら、また同じ割合になるみたいだね。子供のとき、そんなことあると埋もれて動けなくなるが、違う地域へ行ったら、何か物すごく波長が合って頑張ることもあると思うんです。
- 谷垣教育長 100人いるようなところで、試合に出れるのは10人ですが、それでも辞めずに頑張る。残りの90人もね。
- 上田市長 大阪桐蔭もそうですね。

○谷垣教育長 ちょっとまだこれから、それぞれの学校の事情もありますし、地域の都合もありますし、あるいは、競技団体によっても随分違いがありますので、そういうことも聞きながら、基本的には移行していく形になりますが、よろしくをお願いします。

○事務局 いろいろ御議論ありがとうございました。

それでは、以上をもちまして、本日の会議事項は全て終了いたしました。これにて令和4年度第1回大和郡山市総合教育会議を閉会させていただきます。どうもありがとうございました。